

令和三年度

人文学部

学校推薦型選抜

小論文

注意事項

- 一 試験開始の合図があるまで、この表紙を開かないこと。
- 二 試験問題は三枚、解答用紙は二枚、下書き用紙は二枚である。
試験開始の合図があったから確認すること。
なお、文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および汚れなどがあった場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 三 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を算用数字で記入すること。
氏名を書いてはいけない。
- 四 解答はすべて解答用紙に記入すること。指定された解答用紙以外に記入した解答は、評価（採点）の対象としない。
- 五 配布された試験問題および下書き用紙は、試験終了後、持ち帰ること。

令和3年度富山大学学校推薦型選抜

問題訂正

見本

○11月25日(水)

小論文 13時30分試験開始 人文学部

試験問題2枚目の後ろから4行目

(正) 高速道路で走行禁止

(誤) 高速道路で走行禁上

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

「ポピュリズム」というのは定義のむずかしい言葉である。政治用語として頻用されているが、それは必ずしもその語の定義についての集団的合意が成立していることを意味しない。術語の定義は、ふつう同一カテゴリーに属する他の語との差異に基づいて理解される。だから、「民主主義」の定義ははっきりしている。democracy は誰が主権者であるかによる分類法であるから、これの対義語は「王政 (monarchy)」や「貴族政 (aristocracy)」や「寡頭政 (oligarchy)」や「無政府状態 (anarchy)」などである。だから、誰かが「民主主義を廃絶せよ」と主張したとすれば、その人は代替するどれかの政体の支持者であることを明らかにしなければならぬ。

だが、「ポピュリズム (populism)」はそうはゆかない。というのは、ポピュリズムについては、その対義語が何であるかについての合意がまだ存在しないからである。

欧米の政治学の論文を読むと、ポピュリズムはほぼ例外なく「これまでの秩序を揺るがす不安定なファクター」という意味で使われている。だが、そのときの「これまでの秩序」が何を指示するかはその語が利用される文脈によって、ひとつひとつ違っている。だから、トランプの統治についても、ドイツの移民政策についても、イギリスの貿易政策についても、ヴァチカンの宗教政策についても、「これまでの秩序」を揺るがす動きには「ポピュリズム」というタグが付けられる。それらのすべてに一貫している定義を取り出すことは難しい。

こういうとき、一意的に定義されていない語でものごとを論ずる愚を冷笑する人がいるけれど、私はそれには与くみさない。「一意的に定義されていない語」が頻用される場合には、間違いなくそこには「これまでの言葉ではうまく説明できない新しい事態」が発生しているからである。そういう場合は、用語の厳密性よりも、「新しい事態」の前景化を優先してよいと私は考えている。

では、ポピュリズムという一意的な定義が定まらない語によって指称されている「新しい事態」とは何なのか？

私見によれば、ポピュリズムとは「今さえよければ、自分さえよければ、それでいい」という考え方をする人たちが主人公になった歴史的過程のことである。

個人的な定義だから「それは違う」と口を尖とがらす人がいるかも知れないけれど、別にみなさんにこの意味で使ってくれと言っているわけではない。

「今さえよければいい」というのは時間意識の縮減のことである。平たく言えば「サル化」のことである。「朝三暮四ちようさんぼし」のあのサルである。

春秋時代の宋にサルを飼う人がいた。朝夕四粒ずつのトチの実をサルたちに給餌していたが、手元不如意になって、コストカットを迫られた。そこでサルたちに「朝は三粒、夕に四

粒ではどうか」と提案した。するとサルたちは激怒した。「では、朝は四粒、夕に三粒ではどうか」と提案するとサルたちは大喜びした。

このサルたちは、未来の自分が抱え込むことになる損失やリスクは「他人ごと」だと思っている。その点ではわが「当期利益至上主義」者に酷似している。「こんなことを続けていると、いつか大変なことになる」とわかっていながら、「大変なこと」が起きた後の未来の自分に自己同一性を感じることができない人間だけが「こんなこと」をだらだら続けることができる。その意味では、データをごまかしたり、仕様を変えたり、決算を粉飾したり、統計をごまかしたり、年金を溶かしたりしている人たちは「朝三暮四」のサルとよく似ている。

「朝三暮四」は自己同一性を未来に延長することに困難を感じる時間意識の未成熟（「今さえよければ、それでいい」）のことであるが、「自分さえよければ、他人のことはどうでもいい」というのは①自己同一性の空間的な縮減のことである。

集団の成員のうちで、自分と宗教が違う、生活習慣が違う、政治的意見が違う人々を「外国人」と称して排除することに特段の心理的抵抗を感じない人がいる。「同国人」であっても、幼児や老人や病人や障害者を「生産性がない連中」と言って切り捨てることができる人がいる。彼らは、自分がかつて幼児であったことを忘れ、いずれ老人になることに気づかず、高い確率で病を得、障害を負う可能性を想定していないし、自分が何かのはずみで故郷を喪い、異邦をさすらう身になることなど想像したこともない。見知らぬ土地を、飢え、渴いて、さすらい、やむにやまれず人の家の扉を叩いたときに、顔をしかめて「外国人にやる飯はなによ」と言われたときにどんな気分になるものかを想像したことがない。

自分と立場や生活のしかたや信教が違っていても、同じ集団を形成している以上、「なかま」として遇してくれて、飢えていればご飯を与えてくれ、渴いていれば水を飲ませてくれ、寝るところがなければ宿を提供することを「当然」だと思っている人たち「ばかり」で形成されている社会で暮らしている方が、そうでない社会に暮らすよりも、「私」が生き延びられる確率が高い。噛み砕いて言えば、それだけの話である。

「倫理」というのは別段それほどややくいものではない。「倫」の原義は「なかま、ともがら」である。だから「倫理」とは「他者とともに生きるための理法」のことである。他者とともにあるときに、どういうルールに従えばいいのか。別に難しい話ではない。「この世の人間たちがみんな自分のような人間であると自己利益が増大するかどうか」を自らに問えばよいのである。

例えば、渋滞している高速道路で走行禁止の路肩を走るドライバーは他のドライバーたちが遵法的にじっと渋滞に耐えているときにのみ利益を得ることができる。全員がわれ先に路肩を走り出したら、彼の利益は失われる。だから、彼は「自分以外のすべての人間が遵法的であり、自分だけがそうでないこと」を、つまり、「自分のようにふるまう人間が他にいな

い世界」を願うようになる。

これが「非倫理的」ということである。

これはある種の「呪い」として機能する。だって「私のような人間がこの世に存在しませんが、そんなふうに」と熱心に祈っているわけなんだから。この「呪い」は弱い酸のようにつくつき、でも確実に彼の生命力を殺いでゆくことになる。祈りの力を侮^{あなど}ってはならない。

もう一度言うが、倫理というのは別に難しいことではない。今ここにはいない未来の自分を、あるいは過去の自分を、あるいは「そうであったかもしれない自分」を、「そうなるかもしれない自分」を「自分の変容態」として、受け容れることである。そのようなすべての「自分たち」に向かって、「あなたがたは存在する。存在する権利がある。存在し続けることを私は願う」という祝福を贈ることである。

倫理的な人というのが「サル」の対義語である。

だから、ポピュリズムの対義語があるとすれば、それは「倫理」である。私はそう思う。たぶん、同意してくれる人はほとんどいないと思うけれど、私はそう思う。

自己同一性が病的に萎縮して、「今さえよければ、自分さえよければ、それでいい」と思っている人たちが多数派を占め、政治経済や学術メディアでそういう連中が大きな顔をしている歴史的趨勢^{すうせい}のことを私は「サル化」と呼ぶ。

「サル化」がこの先どこまで進むのかは、私にはよくわからない。けれども、サル化がさらに亢進^{こうしん}すると、「朝三暮四」を通り越して、ついには「朝七暮ゼロ」まで進んでしまう。論理的にはそうなる。そのときにはサルたちはみんな夕方になると飢え死にしてしまうので、そのときにポピュリズムも終わるのである。

哀^{かな}しい話だ。

②「サルはいやだ、人間になりたい」という人々がまた戻ってくる日が来るのだろうか。来るとよいのだが。

(内田樹『サル化する世界』文藝春秋、二〇二〇年)

問一 筆者が傍線部①「自己同一性の空間的な縮減」と呼んでいるのはどのようなことですか。二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 傍線部②「サルはいやだ、人間になりたい」という人々がまた戻ってくる日が来るのだろうか」という問いかけについて、筆者の考えと対比させながら、あなた自身の考えを八〇〇字以内で述べなさい。

見本

下書き用紙（解答用紙ではありません）

